

視点1：全教職員で取組を推進するための組織運営

《取組内容》

【校長のリーダーシップとフォローアップ】

「校内分掌検証改善」「研究部役割明確化」

- 学年1人ずつを研究部所属に
- 担当者の後押しと担当者への助言
- 個々の職員の丁寧な見とり
- 教科部会力向上に向けたきっかけづくり

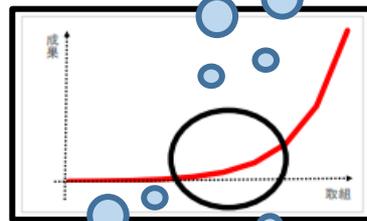
校長の助言を受けて…

★教科部会の開催

- ・ 計画→進捗→総括（定例）
- ・ 指導案協議
- ・ 日々の情報交換（授業・採点）

★校内研（授業研）の協議場は担当教科でグループ協議

- ★ 教科ごとに評価規準を検討
- ★ 関連研修を該当教科で回覧（教科主任のリーダーシップ）



【情報の効率的活用】

- 育成プランそのものを校内研究計画として学校経営計画へ（校内研究計画≒育成プラン）
- 知的財産を使いやすく「共有フォルダ整理整頓」「ICT活用アップデート」
- 急を要しない連絡は掲示板機能で

掲示板記事詳細

← 前の記事

全校生徒へ学習アンケートへのご協力をお願いします【研究より】

カテゴリ 一中学校内

添付ファイル

明日11/20（木）8:00でロイノートに予約配信しています
 学級ごとに送れる時間で、来週いっぱいまでお願いします

連絡をする側も受ける側も、時間に縛られずに済む

【職員への周知とベクトル合わせ】

- 集まった場での周知は「職員の業務量を考慮し、内容と機会を厳選」「深めるべき内容は、時間確保しじっくりと」
- 多くが集まなくてもできる周知は「研究通信」「グループウェア」「主任打ち合わせ」「研究部会」

研究通信では、諸調査結果分析
校内研や互見授業の様子などを折にふれて紹介

【各種事業や外部の活用】

- 市教育委員会指定授業交流会
- ア授業アイデア例活用促進事業
- ウ調査問題等教材活用による授業改善推進事業
- 2年目3年目フォロー研
- 外部講師招聘と各種研修への参加
- 教育事務所や市教育委員会とサイクル進捗状況の定期的な確認機会設定(学力育成推進事業) → 検証改善サイクルの構築と深化

学期に1回程度+指導主事来校時

《提言》

- 全職員が同じベクトルで進むための
- 研究に関わりやすい環境への深化
- ★ 生徒の実態・授業改善を共有するしくみの構築
- ★ 小さなサイクルでのアップデート

視点2：学年や教科を超えた組織的な授業改善の推進

《取組内容》

特支の参観はサテライトでも



【職員が学ぶ見とり方】

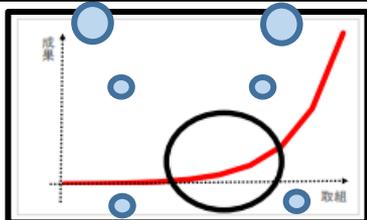
- 多様な教科での授業研究会
「主要5教科」「実技教科」「特別支援」
- 互見授業はポイントのみの参観へ焦点化
→外部講師なしでも職員の変容を促す所感用紙
→「生徒の姿」の見とり方の向上
- 授業づくりを通して、職員も深化を図る対話活動
→育成したい資質・能力の解像度がさらに向上

【対話による生徒の考えの深化】

- 授業中にグループ活動を位置付け、対話がしやすい環境づくり
- 自分の考えを理由とともに伝える姿
→筋道を立てて考える経験増
- 対話をきっかけに自分の考えを再構成し、表現しあう姿
→ゴールのない問いの最適解探し



「本時で身につけさせたい資質・能力」と「資質・能力の育成が見とれる場面」の明記



所感用紙での職員の見とり

時には指導者も一緒に時にはICTも活用して表現

深化した考えを表現しあう活動のしかた

- 結論一つでないことから、生徒の議論が活発になっていった
- 2回目の話し合いの際に、「文中のどの場所に重要なことが書かれる傾向にあるか」という既習の知識を検討の視点に入れたことで、学んだ内容の必要感を実感することや学習内容の定着につながっていた
- 全体で意見を共有したあとにもう一度考えさせるのも、より深く考えることができるのでもよいと思いました
- 発表場面では、グループの意見をまとめ再検討し、その文章が最も大切な理由を互いに伝えていたので、グループディスカッションになっていると感じました

《提言》

「生徒の姿」にこだわった授業改善による深化

★見とり方を学ぶ「校内研」から「互見授業」へ

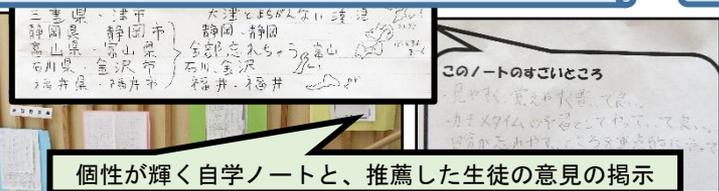
↓めざす姿を明確にした指導と評価の実践

【ゴールとなる生徒の姿から逆算する指導と評価】

- 各教科の学習評価（方法）を検証改善
- 単元全体を見通した授業構想
- 形だけで身にならない家庭学習は削減
→生徒は「やりたい学習」へ焦点化

【基礎基本の定着を図る時間確保】

- 主要5教科の補充学習（カモメタイム）取組
- 国数英の学習コンクール（一中タイム）取組
→教科担任以外の見とりによって他教科でも改善を図りたくなる雰囲気づくり
→生徒（学習委員会など）の力も貴重な資源



学習委員会の活動としてコンクールの採点や、学習方法・学習習慣の改善取組を実施→学級担任を中心に実態把握と検証改善

学習委員会の活動としてコンクールの採点や、学習方法・学習習慣の改善取組を実施→学級担任を中心に実態把握と検証改善

学習委員会の活動としてコンクールの採点や、学習方法・学習習慣の改善取組を実施→学級担任を中心に実態把握と検証改善

視点3：調査結果の積極的活用

《取組内容》

【教科調査の分析と活用】

- 教科調査の分析には
当該教科以外の職員も参画
→分析の視点がより多角的に
→職員間の改善意識向上へ

【3パターンでの職員周知】 ※①だけでも効果大！

- ①つまずきが見とれた教科調査問題の周知
→授業づくり（指導案づくり）の出発点としても活用
- ②教科調査結果分析の部分周知
→経年問題分析でどの学年にも共通した課題（自校が重きを置くべきつまずき）の明確化
- ③質問調査結果分析の部分周知
→教科調査と（生徒・学校）質問調査とのクロス分析で生徒や職員の何気ない行動や思考から図る改善

《提言》

受動的な分析から能動的な分析への深化

★見とりと調査結果をつなげる多角的分析

★育成したい資質・能力にせまる

絞り込みや取捨選択した情報提示

全国学調問題（教科調査分析①）

研究ミーティングで話題になった問題を紹介します。本校の研究主題「考えを深化させる生徒の育成～筋道を立てて考え、表現しあう学習活動を通して～」や重点的の考えや思いを、理由とともに伝える力」に関わりそうな問題です。

問題で話題になった問題（必要に応じて拡大してご覧ください！）

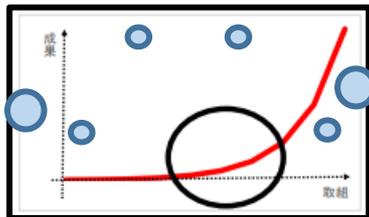
全国学調国語の問題の一部を紹介（取り上げた理由も）

つまずきをもとにした授業改善（数学科指導案）

新入学生調では、図形領域に関して、以下の項目で県の正答率と大きく差があった。

項目	R7本校（県比）	R6本校（現2年）	R5本校（現3年）
①線対称な図形を構成することができる。	34.4（-4.5）	32.0（-8.3）	30.7（-11.2）
②角柱の高さについて理解している。	24.4（-8.7）	29.5（-2.6）	25.2（-7.1）
※図形領域	33.8（-2.5）	30.5（-0.4）	26.7（-2.8）

上記の2項目は、いずれも図形に対する多様な見方に関わる問題である。生徒は一般的に対称性や図形の高さを見いだすことはできるが、図形の向きが変わることで見方が変わってしまう点に困難を感じていると考えられる。また、経年比較から上記2項目は、本校の課題であるといえる。



【研究部のリーダーシップ】

- 質問調査の実施や分析は研究部がきっかけづくり
→学年を超えた課題の確認
→各学年での情報共有
- 定期的な研究部会の実施

【定期的な見とりと改善】

- 数値目標に関わる項目は生徒も職員も振り返り
→生徒へは学期に1回程度実施
職員へは校内研ごとに実施
→生徒も職員もアンケートが意識向上の好機に

（できるときの）
月曜放課後は
研究ミーティング

	授業中にグループ活動を位置づけ、自分の考えを話したり書いたりする機会と時間を確保できていますか			
	1（積極肯定）	2（肯定）	3	4
職員	8%	40%	20%	32%
	19%	58%	19%	4%
	20%	63%	17%	0%

回を重ねるごとに
職員の（積極）肯定回答増加
→職員も生徒も自信をもって積極肯定を答えられる
雰囲気づくり

	学校の宿題などに加え、自ら進んで弱点を克服する学習に取り組んだり、発展的な問題に取り組んだりしていますか						
	1（積極肯定）	2（肯定）	3	4	肯定回答（1+2）	否定回答（3+4）	
3年生	12月	20.2%	47.9%	19.3%	12.6%	68.1%	31.9%
	4月	25.8%	38.3%	18.3%	17.5%	64.1%	35.8%
	11月	24.8%	48.6%	21.1%	5.5%	73.4%	26.6%
2年生	12月	38.5%	39.3%	14.5%	7.7%	77.8%	22.2%
	4月	28.1%	43.9%	14.9%	13.2%	72.0%	28.1%
	11月	32.7%	40.9%	16.4%	10.0%	73.6%	26.4%

- ★回答基準の定義前後（12月と4月）の比較から、生徒がどのようにとらえているかが把握できた
- ★今年度の肯定回答の増加から、今年度の取組は効果的だったと考えられる
- ★3年生の結果から、学習の必要性や意欲の高まりが良い影響を及ぼしていると考えられる